

重力からも解き放たれる絵画

「小林正人展—この星の絵の具」展

蔵屋美香 評

会場は岡山県の西部、安藤忠雄設計の小ぶりの美術館だ。ギャラリーは、部屋が不定形だったり壁に制約があったりと、やや展示が難しい。しかしまた、外光が入る天井の高い吹き抜けなど、小林の特質を引き出すほかにはない空間を備わっている。

さて、成羽町は洋画家、児島虎次郎の故郷で、2階にはその作品がたくさんある。明治から昭和初期の多くの画家たちと同様、児島もまた光を主題とした。キャンバスは、何も描かない地塗りのみの白地が、じつは明度・彩度ともにもっとも高く、明るい。だから児島の世代は、黄色やオレンジで描かれた光を、となりに暗色や補色を置くことで、つまり色と色との対比関係を利用することで、白よりもっと明るく見せる技法を用いた。

対して、例えば吹き抜けに置かれた小林の《星のモデル#4》はどうだろうか。白い地が大きな面積を占める画面に、黄や肌色の絵具がなすられている。ところどころに絵具の固まりがつき、くしゃくしゃと木枠に貼られたキャンバスとともに、絵具やキャンバス、木枠の物質感を強調するようだ。しかし、ふとした瞬間、ある黄色い絵具の固まりが、外光を受けて内側から発光しているのに気づく。絵具とは、光源からの光を反射して色を発する、という以外の役目を持たない特異なものだが、決まった形も構図内の位置も与えられない物質としての絵具の固まりは、ここで「光を受け、黄色と認識される波長を捉えて発する」という機能だけを純粋に遂行するものとなっている。それは、従来の技法のように色と色との対比によって相対的な明るさを獲得するものではなく、それだけで白地よりも何よりもまぶしく純度の高い、光と色そのものである。

この発光をきっかけに、作品全体もまた変化する。この作品を含め、ヌードをモチーフとする床置き作品の多くは、末広りの台形のキャンバスに、床面に接した下半身から頭部を持ち上げる、やはり末広りの三角形をしたヌードを描く。これらはともに上方へと絵画空間を引っ張る方向性を持つ。小林はよく「変換」という言葉を使うが、ここに見られるのは、絵具の発光、上へと向かう力など、さまざまな要素の作用によって、絵具やキャンバスや木枠が、物質から非物質へと「変換」され、重力からも解き放たれていくしくみなのだ。

今回の展示では、最初期の《白ペンキの天使》が非常に高い位置に掛けられ（天使は質料を持たない）、物質性の強い、床から這い起きるような《Unnamed#9》をはさんで、小林の

絵画が再び上空へと浮かび上がりつつあるのを見ることができる。また月の光を描く《この星へ》では、大小二つのキャンバスの間にある実際の距離を、極小から無限大をはらむ距離へといかに「変換」しうるかが試みられているようだ。

まぎれもなく物質でできているのに、それを超えた何かに「変換」されることによって成立する、絵画というもの。まるでルネサンス期にでもありそうな大命題をいくつかの方向から探り続ける、そんな小林の軌跡をじっくり見て考えるよい機会だ。

初出) 美術手帖 2009 年 10 月号 *無断転載を禁じます。



この星へ, 2009, oil, acrylic, canvas, wood, 210x237x16cm , 35x47x7cm



星のモデル#2, 2008, oil, acrylic, canvas, wood, 60x110x12cm



星のモデル#4, 2009, oil, acrylic, canvas, wood, 185x310x50cm



白ペンキの天使, 1984, oil, paint, canvas, 200x130cm

小林正人展—この星の絵の具
2009年7月18日(土) - 2009年9月23日(水)
高梁市成羽美術館